

北京研修を終えて ——外国漢語教師短期研修参加記

西川和男

例年の如く、中国国家留学管理基金委員会主催による「外国漢語教師短期研修」が北京語言文化大学と北京師範大学の2校で開催された。私はその2校のうちの北京師範大学のグループに加わり、約1ヶ月の研修を受けた。研修期間は、7月11日～8月8日が授業、8月9日～20日が終了旅行（自由参加）である。この研修は、北京語言文化大学だけで行われていると思っていたが、数年前からこの2校で行われているとのことである。

今回の日本人参加者は、大阪外国語大学の山崎直樹先生だけであった。きっと他の日本人参加者は、北京語言文化大学で研修を受けておられたのであろうが、語言大学班の状況は全く分からなかった。わが北師大班は、ベトナム、朝鮮民主主義人民共和国、チェコ、ウズベキスタン、イタリア、スイスなどの20名前後の外国教員である。

研修の内容は、中国の言語・文化にかかわる総合的な授業科目が中心で、内容も概論的なものが多かった。

例をあげると、「会話課教学」でも1950年代から中国における中国語教育の歴史の変遷に時間が費やされ、理論を中心とする授業であった。「対外漢語教学と応用言語学」も同様のことが言え、「応用言語学の歴史的発展」と、ここでもまた「対外漢語教育の歴史」が述べられ、概念的な説明が多く、応用言語学における各領域の研究成果が、どのように中国語教育に反映されるべきか、またされているかまでを述べた具体的な講義であれば、より参考になったと思う。「現代漢語語音」では、私にとってとても参考になった。(1) 四声のうち出現率が最も高いのが第4声（第1声・2声・3声は18～20%なのに対し、第4声は35%）なので、四声教育で馬先生は、第4声を重点的に教えている。(2) 四声のうち、いちばん

難しいのが第3声である。馬先生が行った日本人クラスの調査では、ヒヤリングでは第3声を第2声に間違えたのは60%、また発音では第3声を第1声に読み間違えたのが49%あった。

これは、何も日本人に限ったことでなく、中国人が「呉国華明年回陽澄湖」「李小宝九点写講演稿」の両方を読んだ時の波長を調べた調査では、非常に似かよった形になる調査報告も示されている。

また「漢語水平測試」では、HSKは1990年から始まり、1998年末で国内25都市(36ヶ所)、国外17国(32ヶ所)で行われ、受験者総数がこの9年間で延べ14万2000人(115カ国)になるという。国内外合わせて9年間の総数としては少し少ないような気がした。では、最近における毎回の受験者数を知らなかったのが、データが手元にないとのことであった。

「教学観摩」では、いくつかのクラスを見学した。あいかわらず、日本人学生の消極性が目立った。声が小さいし、自由に短文を作る時も自発的に発表しようとしなない。

今回の見学で特に印象に残ったのは、プリンストン大学派遣による10週間特別研修クラスである。大原則として期間中は1日中一切英語を使ってはならない。授業以外でも(当然宿舎でも)彼らは全て中国語を話していた。午前中は、大クラスで文法等を学び、その後、レベルに応じて小クラス(3~4人)に分かれ会話の授業を受け、午後は、教員と1対1で50分間話し、そして週1回のテストがある。

このように集中的に語学教育を行えば上達も速いに違いない。我々もこのような短期集中型教育にとり組んでいかなければならないことを痛感した。

最後に行われた総括討論会でも、参加者それぞれ意見を述べあったが、授業の内容があまり広すぎるので、もう少し語学教育中心にし、我々参加者一人一人が教壇に立ち、模擬授業をして、みんなで批評しあう時間があってもいいのではといった意見もあり、レベルの高さを感じた。

(2000.10.1)